



TOGURI MUSEUM OF ART

戸栗美術館

プレスリリース

至福のうつわ

江戸の日々を彩った古伊万里



色絵 横綱土俵入文 皿
伊万里
江戸時代(19世紀)
口径64.8cm



色絵 藤花短冊文 瓶
伊万里
江戸時代(17世紀後半)
高20.6cm



色絵 花卉文 鉢
伊万里
江戸時代(17世紀末~18世紀初)
口径22.6cm



色絵 赤玉雲地文 蓋付碗
伊万里
江戸時代(18世紀前半)
通高9.1cm



色絵 山水文 富士形皿
伊万里
江戸時代(17世紀後半)
口径16.6×9.4cm



継続開催

1階やきもの展示室
中里月度務
作品展

緊急事態宣言の解除を受け
開幕を早めました

会期

2021年3月24日(水) ~~4月3日(土)~~ ~ 6月20日(日)

※会期は予告なく変更となる場合がございます。

概要

江戸時代の人々は、日々の暮らしにも食や四季の花々、富士山や異国への憧れなど楽しみを見出しました。その生活の中の「至福」の気持ちを分けてくれる色鮮やかな古伊万里、約70点をご紹介します。

ちょっと幸せになれるうつわ

身分制度や種々の法令など、制約が多かった江戸時代。一方で、政治や社会の安定、経済の発展などを背景に、豊かな文化が育まれた時代でもありました。

この時代に誕生し、急成長を遂げたのが伊万里焼です。その伝統は今日まで続きますが、相対的に古い、江戸時代の作品を「古伊万里(こいまり)」と呼びます。1610年代に焼造がはじまった当初は、染付と呼ばれる青色で絵付けしたやきものが主体でしたが、1640年代の技術革新によって鮮やかな多色の色絵も製作できるように。同時に、型を活用した成形技術が発達し、造形の幅も広がりました。

古伊万里の中で最も多いのは、皿や鉢といった食器類。江戸時代に著しく発展した食文化を支える存在でした。また、四季折々の植物あるいは富士や名所を描いたり、かたどったりする作例も。こうした古伊万里の意匠からは、花見や園芸といった植物を愛でる習慣、旅行の隆盛など、江戸時代の多彩な文化の一端がうかがえます。

今回の展覧会では、「食」と「花」、「旅」をテーマとして、華やかな色絵作品を中心に約70点陳列いたします。当時の人々が日々の生活の中で見出したであろう「至福」の気持ちを分けてくれる古伊万里をご堪能ください。

《展覧会紹介文》どうぞ活用ください。

■22word

食や花、旅をテーマに古伊万里約70点をご紹介します。

■93word

江戸時代の人々は、日々の暮らしにも料理や四季の花々、富士山や異国への憧れなど楽しみを見出しました。その生活の中の「至福」の気持ちを分けてくれる色鮮やかな古伊万里、約70点をご紹介します。

みどころ

《目でも舌でも味わいたい》

江戸時代は、食文化が大きく発展した時代でした。新田開発により生産力が高まり、整備された街道や水運を通じて各地の特産物や便利な発酵調味料が流通。18世紀頃からは数多くの料理本が刊行され、江戸や京、大坂などに料理屋が立ち並び、金銭を払えば誰しも食を楽しめるようになりました。

江戸時代初頭に誕生した古伊万里は、当初は武家や公家などの上流階級に儀礼や茶の湯のうつわなどとして用いられました。そして、17世紀末期からの経済の発展と、それに続く食文化の大衆化に伴い、より幅広い層に親しまれる食器として定着していきます。「目でも舌でも味わいたい」と思わせるような、色や形もバラエティ豊かな古伊万里をご覧ください。

①色絵 横綱土俵入文 皿

伊万里 江戸時代（19世紀） 口径64.8cm

口径60cmを超える迫力の皿に、人気横綱・稲妻雷五郎を描いた古伊万里。料理屋などで出されれば、角界の話題にも花が咲き、宴席を盛り上げたことであろう。



②色絵 赤玉瓔珞文 蓋付碗

伊万里 江戸時代（18世紀前半） 通高9.1cm

赤玉や瓔珞文を描いた小碗。蓋付の碗は、料理が冷めにくいという特徴がある。温かい料理を楽しむというのも、江戸時代に花開いた食文化の発展の一端である。

《四季の移ろいを感じたい》

日本の気候の特色は、言うまでもなく「四季」があること。移ろいゆく天候や気温に従い、その時期にしか見られない植物が生い繁ります。繰り返される日常に文字通り花を添えてくれる存在を、古来日本人は大切にしてきました。

江戸時代も例外ではなく、かつてないほど花見や園芸が盛んに。身分に関わらず、人々の楽しみのひとつとなりました。

工芸品の分野においても、吉祥意を持つものが多い植物文様は定番の主題でした。もちろん古伊万里にも、絵付けでも器形でも取り入れられています。「季節の移ろいを感じたい」という欲求を満たしてくれる、四季の花々をあらわした古伊万里をご紹介します。



③色絵 花卉文 鉢

伊万里 江戸時代（17世紀末～18世紀初） 口径22.6cm

欄干越しに桜や椿、芭蕉を眺める景をあらわした鉢。周囲には牡丹文と菊唐草文を交互に描き、花尽くしである。季節の異なる花々を一挙に楽しめるのが面白い。



④色絵 藤花短冊文 瓶

伊万里 江戸時代（17世紀後半） 高20.6cm

たっぷりとした胴部に短冊と藤の花を描いた瓶。藤は銀彩であらわされており、黒く渋みを帯びたさまが味わい深い。

《一度で良いから行ってみたい》

江戸時代の旅は、一生に一度とよく表現されます。旅行者が増加したとは言え、関所を通過するには手形が必須、徒歩による移動のため遠くまで行くにはそれだけ長く家を空けられる環境と、もちろん金銭も必要と、簡単にはいきませんでした。

また、江戸時代は鎖国政策で交易や渡航は制限されていたものの、中国などのアジア圏や、次第に西洋の文物も流入。遠い異国への憧憬も募っていきました。

そんな人々の気持ちを満たすように、手軽に旅気分や異国情緒の味わえる浮世絵や草双紙などが人気を集めていました。そして、古伊万里でも名所や異国の人々をあらわす意匠が登場。誰もが「一度で良いから行ってみたい」と願ったであろう、憧れの景色や事物をあらわした古伊万里をご紹介します。



⑤色絵 山水文 富士形皿

伊万里 江戸時代（17世紀後半） 口径16.6×9.4cm

頂が3つに分かれているのは、富士山のあらわし方の定番。本作では右下に松原も描かれ、憧れの名所としての「富士の松原」の景色が凝縮されている。

※次項の作品①～⑤の写真データ等をご用意しております。ご掲載の際は、お手数ですが別紙写真借用申請書をお送りください。

美術館概要

戸栗美術館は、創設者 戸栗亨が長年に渡り蒐集した陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島家屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里焼、鍋島焼などの肥前磁器および、中国・朝鮮半島などの東洋陶磁が主体であり、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



展覧会概要

※下記の内容は予告なく変更となる場合がございます。予めご了承くださいませ。

名称：『至福のうつわ—江戸の日々を彩った古伊万里—』

会期：2021年3月24日（水）～6月20日（日）

会場：戸栗美術館

所在地：東京都渋谷区松濤1-11-3

開館時間：10:00～12:00／13:30～16:30

（入館受付は閉館時間の30分前まで

／12:00～13:30は館内消毒等の為、閉館いたします）

※毎週金曜日・土曜日は10:00～12:00／13:30～16:30／17:00～20:00

（入館受付は閉館時間の30分前まで／

12:00～13:30および16:30～17:00は館内消毒等の為、閉館いたします）

休館日：月曜日・火曜日

※5月3日（月・祝）～5月5日（水・祝）は開館、5月6日（木）は休館。

入館料：一般1,200円/高大生700円/小中生400円

※4月29日（木・祝）～5月5日（水・祝）は小中学生は入館料無料。

受付にて年齢のわかるものをご提示ください。

交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分、京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分

※当館には駐車場はございません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人 戸栗美術館

広報担当 宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3

TEL：03-3465-0070

FAX：03-3467-9813

URL：http://www.toguri-museum.or.jp/

E-mail：kouhou@toguri-museum.or.jp